ペルーからきた私の娘

藤本和子

晶文社

著者について
藤本和子（ふじもと・かずこ）
一九三九年、東京生まれ。六九年から七三年にかけて「コンサーンド・シアター・ジャパン」を編集。『女たちの同時代　北米黒人女性作家選』（朴日新聞社）を編集刊行。現在アメリカ、イリノイ州在住。
著書―『塩を食う女たち』（晶文社）『砂漠の教室』（河出書房新社）
訳書―M・H・キングストン『チャイナタウンの女武者』『アメリカの中国人』、レニー・ブルース『やつらを蹂りたおせ！』、ブローティガン『アメリカの鱒釣り』『ホークライン家の怪物』『芝生の復讐』『ゾンブレロ落下す』『鳥の神殿』『東京モンタナ急行』（以上晶文社）ほか。

ペルーからきた私の娘（わたしむすめ）
一九八四年六月一五日発行
著者　藤本和子
発行者　株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二―一―一二
電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）
振替東京六―六二七九九
堀内印刷・美行製本
© Kazuko Fujimoto
Printed in Japan
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

ペルーからきた私の娘

藤本和子

晶文社

扉カット　柳生まち子

ブックデザイン　平野甲賀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ペルーからきた私の娘　目次

ペルーからきた私の娘　9
ウィラード盲目病棟
白樺病棟の「高砂」　61
かげりもない、パネイの夜ふけに
ボランティアたちの晩餐会　96
スパゲティかぼちゃ　111
夢　113
オムライス　115
ヘンリーの運勢判断せんべい　122

鯨が生んだ鱒

『アメリカの鱒釣り』の表紙の町 133
『アメリカの鱒釣り』の表紙の男 143
はじまりとおわり 148
連続と不連続 157
一すじの黒髪と紙屑籠 168
ペンキ塗るひと 176
たましいの遺産 187
あとがき 200

ペルーからきた私の娘

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

一月七日

ヤエルはほっそりした長いからだをして、わたしたちのところへきた。生まれて三日目だった。金曜日の朝五時に、三千五百グラムの体重で生まれた。十二月二十一日。

生まれたてのみどり児はまるまると肥ってはおらず、手や脚に多くの皺がある。見えないはずの目を大きく見開いて、じっとある一点に焦点を合わせているように見えたりする。それがひどく真剣なまなざしで、「これからはあなたもまじめに生きるんですよ」と、わたしに伝えようとしているのかしらと思ってしまう。

あたりを見まわすようなようすもする。

心理学者たちの書き記しているものによれば、この時期の乳児には自己と他者の区別もないし、「精神」と呼べるようなものもほとんどなく、あるのは本能的な要求とその充足ばかりで、世界はわずかに光と闇の区別をもつだけ、あとは膨大な渾沌の海らしい。空腹と充足と睡眠を繰り返して、昼と夜の区別もなく、深夜にも食事をする。そのようなみどり児がやがて、自己と他者の区別、大気と水の区別、昼と夜の違いなどを理解するようになるのだが、その過程について考えていたら、ふと旧約聖書の「創世記」のことが頭に浮かんだ。「創世記」は「はじめに神は天と地を創った」という文で始まるが、その地は、まだ形をなさず、虚空であり、闇が深淵をおおっていた、という。地と水の区別もなく、世界は巨大な渾沌だった。神はまず「光あれ」といったそうだが、すると光が現われた。そして「神は闇から光を区別した」とあり、光を「日」と呼び、闇を「夜」と呼ぶことにしたのだが、それが創世の仕事の第一日目の作業だった。

二日目には水と天空が区別され、三日目には水と大地が区別された。そして、四日目にはついに「時間」が存在するようになる。

ヤエルを見ながら、みどり児の完璧さに息を呑む。そして彼女がいっさいの区別を拒ん

でいる液体のような世界にいるらしいことを想像してみる。さらに彼女が現在の未分化の世界からゆっくりと脱出して行く、その過程が、太古に「創世記」を想像した人びとが思い描いた世界の誕生の段取りにひどく似ていることに驚くのだ。

こんなことは、もう言い古されていることに違いない。これまでは「まあ、そんなこともいえるんだろう」と軽く見過し読み過してきたことに違いない。でも、誰でも、自分が新発見したように感じてしまうのだろうか。

みどり児は生きのび生き続ける衝動に突き動かされている。空腹になると、餌をせがむ黄色い大口のつばめのひなのように、顔中が口になってしまう。そして、からだを板のように固くして泣き叫ぶ。子供をいやしんでいう言葉として餓鬼という言葉が使われるようになったのは江戸時代だろうか。それにしても、世の終りがきたとでもいわんばかりに泣き叫ぶ空腹の赤子のようすは、餓鬼道に落ちた亡者のイメージと重ならないこともなく、「子供のことを餓鬼とはよくいったものだ」などとまた感心してしまう。

未分化で区別のつかない手さぐり状態は、なにも生まれたての子に限ったことではない。こちらも、区別のつかないことばかりでおもしろい。四十歳になってはじめて子を育てる

ことになったのだから、わたしはうら若い母親のようにおろおろしたりはしないからな、とひらきなおっている。だから、どうも見当のつけにくいことや、わけのわからなくなる場合については、まず感心したり、おもしろいと思ったりすることにしているのだ。それからおもむろに考えよう。

こちらにはわからない理由で、長い時間泣き叫んでいることがある。暗黒の呆然状態を運ぶオニの子かしらねえ、と疑ってみたりする。その泣きわめく声は永遠に続くかに思え、わたしの暮しにはこの泣き声以外にはもう何も存在しなくなった、と悲観的になると、その瞬間、泣き声は止み、固く突っぱっていた小さなからだが、やわらかくやわらかく、ただあたたかく腕の中にある、という状態がやってくる。すると、もうこんどはそのうつくしさにわたしの息は止まる。

嬰児が火がついたように泣く、というような表現は小説や芝居のト書きなどによく出てくるが、赤子はほんとに燃えるように泣く。からだを突っぱって、小さな炎と化して泣く子を抱いていれば、時間もはたりと停止して、子と親は泣き声の中に永劫に閉じこめられてしまったような錯覚があって、呆然とするのだ。

忘れてしまうのだ。あらゆることがたえず過ぎ去りつつあることを忘れてしまう。板の

ようにからだをこわばらせて泣くことも、また違った泣きかたに変化する、と書物にはあるし、現在まだヤエルに残っている自然な反射作用もまもなく消えてしまうらしいし、まだ胎児の感じを多く残しているからだつきや容貌も、このとうといばかりの軽さも、わたしたちがちょっと脇目をしたらもう消えていた、というようなものだろうと思う。

ところが、ヤエルがきてくれて、親になったのだという事実の内容というか、実体は、まだまだわからない。一時間でも離れていると、恋人をついうっかりどこかに置き去りにしてきたような気持になるが、この子があくまでもわたしとは別の一人の人間で、どれほど愛し合うことになろうとも、わたしたちはべつべつの人間二人として、生きてゆくのだということは知っている。わたしがわたしから流れ出し、ヤエルに融け込んで混ざってしまうことはできないように、彼女にもそれはできない。こんなことを思うのは、ヤエルがミルクを呑んで、その動作の反射作用として腸が動き始めるときだ。彼女は、痛いんだ、というような表情で何かを訴えているし、手足をバタバタ振り動かし、時には顰めっ面して、哺乳瓶の乳首に噛みつくようにする。それをじっと抱いていると、こんなに小さな子が苦しんでいるのに、その肉体の苦痛を代ってやれないことはひどく不条理に感じられる。不条理だなあ、という不満は、しかしある予感につながる。この子が成長してゆく過程

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb